

妙法蓮華經。見寶塔品。第十一

爾の時に佛前に七寶の塔あり。高さ五百由旬、縱廣二百五十由旬なり。地より涌出して空中に住す。種種の寶物をもつて之を莊校せり。五千の欄楯あつて龕室千萬なり。無數の幢旛以て嚴飾となし、寶の瓔珞を垂れ、寶鈴萬億にして其の上に懸けたり。四面に皆多摩羅跋栴檀の香を出して、世界に充徧せり。其の諸の旛蓋は金・銀・瑠璃・砗磲・碼碯・眞珠・玫瑰の七寶を以て合成せり、高く四天王宮に至る。三十三天は天の曼陀羅華を雨して寶塔に供養し、餘の諸天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等の千萬億衆は、一切の華・香・瓔珞・旛蓋・伎樂を以て寶塔に供養して、恭敬・尊重・讚歎したてまつる。

爾の時に寶塔の中より大音聲を出して、歎めて言わく善哉善哉、釋迦牟尼世尊、能く平等大慧・教菩薩法・佛所護念の妙法華經を以て大衆の爲に説きたまう。是の如し、是の如し。

釋迦牟尼世尊所説の如きは皆是れ眞實なり。

爾の時に四衆、大寶塔の空中に住を在せるを見、又塔の中より出したもう所の音聲を聞いて皆法喜を得、未曾有なりと怪み、座より而も起つて恭敬合掌し、却つて一面に住す。

爾の時に菩薩摩訶薩あり、大樂説と名く。一切世間の天・人・阿修羅等の心の所疑を知つて、佛に白して言さく、

世尊、何の因縁を以てか此の寶塔あつて地より涌出し、又其中より是の音聲を發したもう。

爾の時に佛、大樂説菩薩に告げたまわく、

此の寶塔の中に如來の全身います。乃往過去に、東方の無量千萬億阿僧祇の世界に、國を寶淨と名く、彼の中に佛います、號

を多寶という。其の佛本菩薩の道を行ぜし時、大誓願を作したまわく、

若し我成佛して滅度の後、十方の國土に於て法華經を説く處あらば、我が塔廟是の經を聽かんが爲の故に、其の前に涌現して、爲に證明と作つて、讚めて善哉といわん。彼の佛成道し已つて、滅度の時に臨んで天・人・大衆の中に於て、諸の比丘に告げたまわく、

我が滅度の後我が全身を供養せんと欲せん者は、一の大塔を起つべし。

其の佛、神通願力を以て、十方世界の在在處處に、若し法華經を説くことあれば、彼の寶塔皆其の前に涌出して、全身、塔の中に在して讚めて善哉善哉と言ふ。大樂説、今多寶如來の塔、法華經を説くを聞きたまわんが故に、地より涌出して讚めて善哉善哉と言ふ。

是の時に大樂説菩薩、如來の神力を以ての故に、佛に白して言さく、

世尊、我等願わくは此の佛身を見たてまつらんと欲す。

佛、大樂説菩薩摩訶薩に告げたまわく、

是の多寶佛深重の願います。若し我が寶塔、法華經を聽かんが爲の故に諸佛の前に出でん時、其れ我が身を以て四衆に示さんと欲することあらば、彼の佛の分身の諸佛十方世界に在して説法したもうを、盡く一處に還し集めて、然して後に我が身すなわち出現せんのみ。大樂説、我が分身の諸佛十方世界に在つて説法する者を、今當に集むべし。

大樂説、佛に白して言さく、

世尊、我等亦願わくは世尊の分身の諸佛を見たてまつり禮拜し供養せんと欲す。

爾の時に佛白毫の一光を放ちたもうに、即ち東方五百萬億那由他恒河沙等の國土の諸佛を見たてまつる。彼の諸の國土は皆頗黎を以て地となし、寶樹・寶衣以て莊嚴として、無數千萬億の菩薩其中に充滿せり。徧く寶幔を張つて寶網上に羅けたり。彼の國の諸佛、大妙音を以て諸法を説きたもう。及び無量千萬億の菩薩の、諸國に徧滿して衆の爲に法を説くを見る。南・西・北方・四維・上・下、白毫相の光の所照の處も亦復是の如し。

爾の時に十方の諸佛、各衆の菩薩に告げて言わく、善男子、我今娑婆世界の釋迦牟尼佛の所に往き、并に多寶如來の寶塔を供養すべし。

時に娑婆世界即ち變じて清淨なり。瑠璃を地となして寶樹莊嚴し、黄金を繩として以て八道を界い、諸の聚落・村營・城邑・大海・江河・山川・林藪なく、大寶の香を焼き、曼陀羅華徧く其の地に布き、寶の網幔を以て其の上に羅け覆い、諸の寶鈴を懸けたり。唯此の會の衆を留めて、諸の天人を移して他土に置く。

是の時に諸佛、各一りの大菩薩を將いて以て侍者とし、娑婆世界に至つて各寶樹の下に到りたもう。一一の寶樹高さ五百由旬、枝・葉・華・果、次第に莊嚴せり。諸の寶樹下に皆師子の座あり、高さ五由旬。亦大寶を以て之を校飾せり。爾の時に諸佛、各此の座に於て結跏趺坐したまう。是の如く展轉して三千大千世界に徧滿せり。而も釋迦牟尼佛の一方所分の身に於て、猶故未だ盡きず。

時に釋迦牟尼佛、所分身の諸佛を容受せんと欲するが故に、八方に各更に二百萬億那由他の國を變じて、皆清淨ならしめたもう。地獄・餓鬼・畜生及び阿修羅あることなし。又諸の天

・人を移して他土に置く。所化の國亦瑠璃を以て地と爲し寶樹莊嚴せり。樹の高さ五百由旬、枝・葉・華・果、次第に嚴飾せり。樹下に皆寶の師子座あり、高さ五由旬。種種の諸寶以て莊校とす。亦大海・江河及び目眞鄰陀山・摩訶目眞鄰陀山・鐵圍山・大鐵圍山・須彌山等の諸山の王なく、通じて一佛國土となつて寶地平正なり。寶をもつて交露せる幔徧く其の上に覆い、諸の旛蓋を懸け、大寶の香を燒き、諸天の寶華徧く其の地に布けり。

釋迦牟尼佛、諸佛の當に來り坐したもうべきが爲の故に、復八方に於て、各二百萬億那由他の國を變じて、皆清淨ならしめたもう。地獄・餓鬼・畜生及び阿修羅あることなし。又諸の天・人を移して他土に置く。所化の國亦瑠璃を以て地と爲し寶樹莊嚴せり。樹の高さ五百由旬、枝・葉・華・果、次第に莊嚴せり。樹下に皆寶の師子座あり、高さ五由旬。亦大寶を以て之を校飾せり。亦大海・江河及び目眞鄰陀山・摩訶目眞鄰陀山・鐵圍山・大鐵圍山・須彌山等の諸山の王なく、通じて一佛國土となつて寶地平正なり。寶をもつて交露せる幔徧く其の上に覆い、諸の旛蓋を懸け、大寶の香を燒き、諸天の寶華徧く其の地に布けり。

爾の時に東方の釋迦牟尼佛の所分の身の百千萬億那由他恒河沙等の國土の中の諸佛、各各に說法したまえる此に來集せり。是の如く次第に十方の諸佛皆悉く來集して、八方に坐したもう。爾の時に一方の四百萬億那由他の國土に、諸佛如來其の中に徧滿したまえり。

是の時に諸佛各寶樹下に在して師子座に坐し、皆侍者を遣わして釋迦牟尼佛を問訊したもう。各寶華を齎ち掬に滿てて、之に告げて言わく、

善男子、汝耆闍崛山の釋迦牟尼佛の所に往詣して我が辭の如く曰せ、

少病少惱、氣力安樂にましますや。及び菩薩・聲聞衆悉く安穩なりや不やと。此の寶華を以て佛に散じ供養して、是の言をなせ、彼の某甲の佛此の寶塔を開かんと與欲すと。諸佛使を遣わしたもうこと亦復是の如し。

爾の時に釋迦牟尼佛、所分身の諸佛悉く已に來集して、各各に師子の座に坐したもうを見わし、皆諸佛の同じく寶塔を開かんと與欲したもうを聞こしめして、即ち座より起つて虚空の中に住したもう。一切の四衆起立合掌し、一心に佛を觀たてまつる。

是に釋迦牟尼佛右の指を以て七寶塔の戸を開きたもう。大音聲を出すこと、關鑰却けて大城の門を開くが如し。即時に一切の衆會、皆多寶如來の寶塔の中に於て師子座に坐したまい、全身散ぜざること禪定に入るが如くなるを見、又其の、善哉善哉釋迦牟尼佛、快く是の法華經を説きたもう。我是の經を聽かんが爲の故に而も此に來至せりと言うを聞く。

爾の時に四衆等、過去の無量百千萬億劫に滅度したまいし佛の、是の如き言を説きたもうを見て、未曾有なりと歎じ、天の寶華聚を以て多寶佛及び釋迦牟尼佛の上に散ず。

爾の時に多寶佛、寶塔の中に於て、半座を分ち釋迦牟尼佛に與えて、是の言をなしたまわく、

釋迦牟尼佛此の座に就きたもうべし。

即時に釋迦牟尼佛其の塔中に入り、其の半座に坐して結跏趺坐したもう。爾の時に大衆、二如來の七寶塔中の師子座上に在して結跏趺坐したもうを見たてまつり、各是の念をなさく、

佛高遠ほとけこうおんに坐ざしたまえり。唯願ただねがわくは如來にょらい、神通力じんづうりきを以もつて我が等輩ともがらをして俱ともに虚空こくうに處しよせしめたまえ。

即時そくじに釋迦牟尼佛しゃかにぶつ、神通力じんづうりきを以もつて諸もろもろの大衆だいしゆを接せつして皆虚空みなこくうに在おきたもう。大音聲だいおんじやうを以もつて普あまねく四衆しゆに告つげたまわく、

誰たれか能よく此この娑婆しゃば國土こくどに於おいて廣ひろく妙法華經みようほけきやうを説とかん。今正いまましく是これ時ときなり。如來にょらい久ひさしからずして當まさに涅槃ねはんに入いるべし。佛ほとけ、此この妙法華經みようほけきやうを以もつて付屬ふぞくして在あることあらしめんと欲ほつす。

爾その時ときに世尊せそん、重かさねて此この義ぎを宣のべんと欲ほつして、偈げを説といて言のたまわく

聖主世尊しやうしゆせそん 久ひさしく滅度めつどしたもうと雖いえども

寶塔ほうとうの中うちに在まして 尙なお法の爲ために來きたりたまえり

諸人しよにん云何いかにんぞ 勤つとめて法の爲ためにせざらん

此この佛滅度ほとけめつどしたまいて 無央數劫むおうしゆこつなり

處處しよしよに法ほうを聽ききたもうことは 遇あい難がたきを以もつての故ゆえなり

彼かの佛ほとけの本願ほんがんは 我滅度われめつどの後のち

在在ざいざい所往しよおうに 常つねに法ほうを聽きかんが爲ためにせん

又また我が分身ふんじん 無量むりやうの諸佛しよぶつ

恒沙等ごうじゃとうの如ごとく 來きたれる法ほうを聽き

及および滅度めつどの 多寶如來たほうにょらいを見みたてまつらんと欲ほつして

各おのの妙土みようち 及および弟子衆でししゆ

天てん・人にん・龍神りゆうじん 諸もろもろの供養くやうの事じを捨すてて

法ほうをして久ひさしく住じゆせしめんが故ゆえに 此こに來らい至ししたまえり

諸佛しよぶつを坐ざせしめんが爲ために 神通力じんづうりきを以もつて

無量むりやうの衆しゆを移うつして 國くにをして清淨しやうじやうならしむ

諸佛しよぶつ各各かくかくに 寶樹下ほうじゆげに詣いたりたまう

清涼池しやうりやうちの 蓮華莊嚴れんげしやうげんせるが如ごとし

其その寶樹下ほうじゆげの 諸もろもろの師子座ししざに

佛其上に坐したまいて 光明嚴飾せること

夜の闇の中に 大なる炬火を然せるが如し

身より妙香を出して 十方の國に徧じたもう

衆生薫を蒙つて 喜自ら勝えず

譬えば大風の 小樹の枝を吹くが如し

是の方便を以て 法をして久しく住せしむ

諸の大衆に告ぐ 我が滅度の後に

誰か能く斯の經を 護持し讀誦せん

今佛前に於て 自ら誓言を説け

其れ多寶佛 久しく滅度したもうと雖も

大誓願を以て 師子吼したもう

多寶如來 及與我が身

集むる所の化佛 當に此の意を知るべし

諸の佛子等 誰か能く法を護らん

當に大願を發して 久しく住することを得せしむべし

其れ能く此の經法を 護ることあらん者は

則ち爲れ我及び 多寶を供養するなり

此の多寶佛 寶塔に處して

常に十方に遊びたもう 是の經の爲の故なり

亦復 諸の 來りたまえる化佛の

諸の世界を 莊嚴し光飾したもう者を供養するなり

若し此の經を説かば 則ち爲れ我

多寶如來 及び 諸の化佛を見たてまつるなり

諸の善男子 各諦かに思惟せよ

此は爲れ難事なり 宜しく大願を發すべし

諸餘の經典 數恒沙の如し

此れ等を説くと雖も 未だ難しと爲すに足らず

若し須彌を接つて 他方の
無數の佛土に擲げ置かんも 亦未だ難しとせず
若し足の指を以て 大千界を動かし
遠く他國に擲げんも 亦未だ難しとせず
若し有頂に立つて 衆の爲に
無量の餘經を演說せんも 亦未だ難しとせず
若し佛の滅後に 惡世の中に於て
能く此の經を説かん 是れ則ち難しとす
假使人あつて 手に虚空を把つて
以て遊行すとも 亦未だ難しとせず
我が滅後に於て 若しは自らも書き持ち
若しは人をしても書かしめん 是れ則ち難しとす
若し大地を以て 足の甲の上に置いて
梵天に昇らんも 亦未だ難しとせず
佛の滅度の後に 惡世の中に於て
暫くも此の經を讀まん 是れ則ち難しとす
假使劫燒に 乾ける草を擔い負うて
中に入つて燒けざらんも 亦未だ難しとせず
我が滅度の後に 若し此の經を持つて
一人の爲にも説かん 是れ則ち難しとす
若し八萬四千の法藏
十二部經を持つて 人の爲に演說して
諸の聽かん者をして 六神通を得せしめん
能く是の如くすと雖も 亦未だ難しとせず
我が滅後に於て 此の經を聽受して
其の義趣を問わん 是れ則ち難しとす
若し人法を説いて 千萬億無量無數

恒沙の衆生をして 阿羅漢を得

六神通を具せしめん

是の益ありと雖も 亦未だ難しとせず

我が滅後に於て 若し能く斯の如き

經典を奉持せん 是れ則ち難しとす

我佛道を爲て 無量の土に於て

始より今に至るまで 廣く諸經を説く

而も其の中に於て 此の經第一なり

若し能く持つことあるは 則ち佛身を持つなり

諸の善男子 我が滅後に於て

誰か能く此の經を 受持し讀誦せん

今佛前に於て 自ら誓言を説け

此の經は持ち難し 若し暫くも持つ者は

我即ち歡喜す 諸佛も亦然なり

是の如きの人は 諸佛の歎めたもう所なり

是れ則ち勇猛なり 是れ則ち精進なり

是れを戒を持ち 頭陀を行ずる者と名く

則ち爲れ疾く 無上の佛道を得たり

能く來世に於て 此の經を讀み持たんは

是れ眞の佛子 淳善の地に住するなり

佛の滅度の後に 能く其の義を解せんは

是れ諸の天・人 世間の眼なり

恐畏の世に於て 能く須臾も説かんは

一切の天・人 皆供養すべし